

読書運

第43号

動通信

はじめに

いよいよ待ちに待った夏休みです。旅行や花火大会など、楽しい計画を立てている人も多いことでしょう。

附属図書館緑園本館は、八月九日（木）～一九日（日）は休館です。また、七月一七日（火）からは夏休みの長期貸出しになり、学生、院生の皆さんへの貸出し期間は一〇月四日（木）までとなります。（CD、レコードは対象外。オープンカレッジ生、卒業生、フェリス中高生、教職員は通常どおり）

長い休みを利用して、今まで手を出しかねていた本に、是非トライしてみてください。

（図書館事務室）

特集：2007年度随想コンクール結果発表

紹介：私の好きな児童文学・第4回

お知らせ：創作コンクール作品募集他

発行：2007年7月31日

フェリス女学院大学附属図書館
読書運動プロジェクト

特集 随想コンクール本結果発表

参考図書 内田 樹 著『下流志向』

本田 由紀 著『ニート』って言うな！

本田 由紀 著『多元化する「能力」と日本社会』

おめでとうございます！

・第一席 コミュニケーション学科 一年 山崎愛実

『ニート』って言うな！』を読んで考えたこと

「じゃあ何て言えばいいの！」

・次席 国際交流学科 四年 山田悦子

『下流志向』を読んで考えたこと

「そして大人は…？」

・第三席 国際交流学科 四年 菅田久美子

『下流志向』を読んで考えたこと

「学ばない、働かないという選択

第一席

『「ニート」って言うな！』を読んで考えたこと

「じゃあ何て言えばいいの！」

コミュニケーション学科 一年 山崎愛実

表題は、私が本書のタイトルを見て率直に思ったことだ。しかし、その私の問いに対する答えは本書からは返ってこなかった。その代わり、こんなことを教えてくれた。

「しばらくすると、まちがいはなくニートという言葉は消えていきま

す」
第一部で、私は恥じた。ニートがニートのままである原因は、若

者自身や家庭のせいだけではないのに、そのように定義し、そう思い込んでいた私たちを。

今現在ニートは、その態度と存在から、大衆の憎悪と不安の標的にされている。私もまた、快くは思っていなかった。しかし本書を通して、その原因となっていたのは私たち、ニートを間接的に知らない第三者であったことを知り、深く反省した。その証拠として、ニート以前に注目されていたフリーター問題などに対して、日本も二〇〇三年には「若年就労問題の最大の要因はやはり労働需要側にある」という認識が地歩を得つつあった」にもかかわらず、二〇〇四年、「ニート」という言葉が日本に導入された途端、就労問題を抱える若者に対し「働こうとしない本人が悪い」という非常にネガティブなイメージが蔓延し始めた、という事実がある。

これには大きなショックを受けた。何だ、私たちは結局、流行にのせられていただけではないかと日本人のあまりに影響されやすい性質を悔んだ。その物珍しさから私たちは、明確な知識もないまま「ニート」という言葉を濫用した。その結果が今だ。今、「二〇〇七年問題」と懸念された二〇〇七年を迎え、団塊の世代が一斉退職を始めるというのに、若者のそれ相応の就労は期待できない状態にある。履歴書に空白期間があるから「ニート」、ニートは「怠け者」。

こんな概念を植えたのはニートそのものではなく、「ニート」という言葉に過剰反応した私たちだったのだ。私たちはニートを迷惑がるどころか、ニートに迷惑をかけていた。

第一部ではそういった、既に出来上がってしまったニートに対する偏見、今後予想される就労問題に対し、「職業能力」で対抗しようという考えが挙げられている。例えば、学校の専門化を強化し在学中に職業的意義をもたせるもの。就職活動は職業能力を持たない在

自分に合った職業を見出すというものである。

私はこの案に賛成である。何故なら私は以前から、大学三年生の後期からは就職活動という、事前すぎる事前準備に大きな不満を抱いていたからだ。四年制大学に入学するからには四年間きっちり学びたい、というのが正直な思いであったし、今もその思いは変わらない。また、高校の専門化については、現在日本の高校生の四分の三が普通科に在学していることで進路、就職への不安や、明確な夢を見つけれないなどの問題解決にも繋がると思いを肯定する。これは実際、私も普通科在学中に友人の間でよく耳にした話題であったからだ。

次に、学校と企業における信頼関係による学校経由の就職を減らすという案だ。これには、あまり効果がないと思うのだが、本文の「誰かがうまくいっているうちは、うまくいっていない人は単に例外的な層としか扱われず、放置され」という言葉には共感した。こういった制度で、就職に格差が出てしまうのに、確かに私たちはうまくいっている例しか知らされないからだ。しかし、これは在学中の個人の業績によるものでもあるので、一概にそういう「ニート候補者」を庇うことはできないのも事実である。

また、ここで私が最も興味をもったのは、ドイツの「デュアルシステム」という制度についてである。これは従弟制のような訓練制度で、長期にわたる専門的訓練を受けるというものである。しかしドイツでは、専門職を長い間学んだからといって、その職だけに進路を絞るような考え方はしないという。一方で日本人は、例えば高校で専門科目を学んだら、その科目の進路にしか進めないと思い込む傾向が強い。それゆえに普通科を選ぶ者も少なくなく、私も同様の理由から普通科を選んでいたため、身をもって日本人の固定観念払拭の必要性を知った。

このように、第一部を読んで、私は「ニート」という言葉がここまで話題になった背景に、特に日本人特有の考え方が影響していたと考える。それは若者自身や企業の問題も踏まえた上で、何より二〇〇四年以降の「ニート」という言葉に対する人々の、あまりの態度の変化に思わず言葉を失ったからだ。そうして私たち自身で大きな問題に、それも大変捻くれた方法で発展させてしまったというのに、『ニート』という適切でない概念を持ち出して、若者自身やその家庭に責任を押し付け「るのは、同じ社会に生きるものとして恥すべきことであると実感した。

第二部で、私は気付いた。マスコミによって、都合よく洗脳され、若者だけに重点を置いている私たちに。

「なぜ人を殺してはいけないのかわからない」と発言したのが青少年だから、神戸連続殺傷事件や黒磯市の女性教員刺殺事件の犯人が青少年だから、青少年は「凶悪化」し、「キレル若者」が急増した。極めつけに、二〇〇四年の佐世保で起きた小六女児による同級生殺害事件にみられるように、今の「子どもが変だ」。これらは日本をかきめぐるキャッチフレーズとなった。

そうして世間が青少年を悪者に仕立てあげる様子を青少年側から見ている私は、素直に疑問に思っていた。いや、そんなの、一部のやつだけだろ、と。それに、様々な資料が物語るように、青少年の事件は確実に減ってきている。だが世間はそれを認めず、「何か大きな事件が起こると、それを『現代社会の病理』として捉えるようなしくみができてしまっている」のには、甚だ迷惑としか言いようがない。若いというだけで、不審感をもたれ、疑いをかけられ、警戒される。今の青少年は、マスコミからの情報で判断されているといっても過言ではない。

もしそれに意義を唱えるなら、本書の一六九ページから一七〇ペ

ージを読んでみてほしい。すると、本当に凶悪化したのは誰かがわかってくるはずだ。少なくとも私は、それは青少年ではないと確信している。そこに書かれている、本当に問題視されるべきなのは「何歳の人が、人を殺した」ことではなく、「人が人を殺した」ことであるという言葉に、納得しない人など果たしているのだろうか。

以上のことは、ニート問題においても本質が無視されているという根拠となるだろう。同様に、私たちが本質でなく話題性だけで青少年を判断していたことも認めざるを得ない。それは私たち青少年側からすれば、今現在青少年でない人たちに特に真摯に受け止めてもらいたい。

「社会問題にすべきは若者ではなく、若者を問題化する社会的勢力とその悪影響」であると主張するのは、そんなにも偉そうで、理解しがたいことなのだろうか。

第三部で、私は確信した。「ニート」という言葉は要らない。

世間の、「自立しない若者」への苛立ちは以前から存在していた。「パラサイト・シングル」、「ひきこもり」などという言葉がそうだ。

私はこれらの、特に後者の言葉を目にした際、単純に懐かしいと感じた。恐らく、私と同じ考えの人も少なくないだろう。これはつまり、「ニート」も流行のひとつに過ぎないということではないだろうか。

「多くの『ニート』論が、単に巷の青少年問題言説の焼き直しでしかなくなっている」、「多くの人が、『ニート』を単なる『今時の若者』論の延長上にしか考えていないし、そのような形で展開されている言説が多い」とあるように、私たちは、今までも今現在も、何かしらの「言葉」に対する言及を続けている。つまり、それが何であっても非難の矛先にさえなれば、何の問題もないわけだ。それゆえに、ひと昔前には「ひきこもり」、「ふた昔前には「パラサイト・シングル」

という言葉が存在していた。「ニート」は、それを引き継いだに過ぎないといえる。

「ニート」という言葉の本来の意味は、「一五歳〜三四歳で、就業もしていなければ教育も受けておらず、また求職活動もしていない若年層」である。しかしこれはあくまでも日本における定義で、この言葉が生まれたイギリスでは本来、失業者や不安定な就労状態の、一六歳〜一八歳の若者」のみを意味するという。そもそも、日本以外の国では「NEET」という言葉はほとんど使われていないのに、日本だけが、「ニート主婦」やら、「ニート化する社会」などと、本来の意味で考えれば意味不明な単語を一般人のみならず、様々な分野の著名人までもが濫用、誤用を止めないのはあまりに見苦しい。こんなことでは世間どころか、世界に笑われてしまう。

日本においての「ニート」はその本来の意味も問題点も無視されながら、一人歩きを始めてしまっている。「ニート」の中にもタイプがあり求職型、非求職型、非希望型、そんなことは議題にさえあがらず、「ニート」という言葉に支配され、もはや「ニート」が「ニート」である必要性は感じられない。「ニート」が「トーン」になったとしても、誰もそれを指摘しないだろう。現に、「パラサイト・シンブル」が「ニート」になったところで、言葉が変わっただけで結局は若者に対するバッシングの対象という点では何も変わらなかつたのだ。

「ニート」という言葉は要らない、それは正確に言えば、「ニート」に続く「言葉は要らない」ということだ。

『「ニート」という言葉自体がバッシングの免罪符』。私が本書を読んで最も強く印象に残った言葉である。人々は自分の不満を述べる権利を得るために、必死になって「ニート」という言葉に縋り付いていただけだったのだ。免罪符の運命は、言うまでもない。

従って、本書を読んだ私は、今後一切「ニート」とは言わないし、代わりの言葉も探さない。「しばらくすると、まちがいなくニート」という言葉は消えていきます」から。

次席

『下流志向』を読んで考えたこと〜そして大人は…？

国際交流学科 四年 山田悦子

子どもたちが学びから逃走している。なるほど、子どもは学びから逃走しているらしい、つまり学ぶことを拒否しているということである。これを最初に読んだ私の考えとしては、学びから逃げることも重要ではないかと言う考えであった。学びから逃げることに重要であると考えるのは、かつて高校時代の私が逃げたかったことに起因していると感じる。私は逃走を試みたが失敗したのである。なぜ、逃げたかったのか？断っておくが、その当時の私にはちゃんと将来こうなりたいと言う目標を持って、高校に入学し、それが勉強したくて高校を選んだつもりであった。しかしである、その学校で私が望んでいた勉強は与えられなかった。ひたすら、座学のとても受身的な勉強であり、楽しくなかった。なので、私は逃走を試みたが、できなかった。なぜなら、著者が指摘していた勉強による効果をなんとなく知っていたからである。それは未来を切り開くものであり、高校合格はその結果でもあった。しかし、いざその結果を体験してみると、なんとも面白くない授業が待っていた。そして、逃走に失敗し、体調を壊してまで勉強をする日々が続いたのである。このような私の経験から、著者の述べる学びから逃走する今の子どもを、ある意味で尊敬する一方で、著書と同様の危機感を

覚えるが、それと同時に、怒りを覚えてくる。学びから逃走する子ども……。この要因は、子どもが消費主体という意識が強くなってしまった結果、またその要因は今の社会にある、そしてそれはけしからん……。

由々しき自体であることは理解できるが、子どもを非難する一方で、大人への批判は見られない。ただただ、子どもとは違う立場つまり、大人の視点に立つことで今の問題を告発している。それは納得できる。しかし、ただただ批判を繰り返すだけで、ではこうしよう、また、この問題の根本を言い当てていない、見ようとしていない印象を受ける。

以上のように、読後感は、共感はあるが、それと同じように反発もするというものであった。以下では、私が何に反発に共感したのかについて述べていくことにする。

一つ目の反発はそもそもなぜ、子どもたちは逃走するのかということである。なぜこのような疑問を持つのかというと、子どもが消費主体のように授業を受ける親は、かつて学びをありのままに受け止めた子どもであった。その子どもが当然消費主体となり、学びの価値を値踏みしだした。ある日突然、変異が起こり子どもが変わったという印象を受ける。しかし、子どもには罪がないのである、罪があり、改めるべきものは大人である。子どもには責任がない、それを逃走するのは悪いといって、今の子どもを批判するのはおかしい。つまり、なぜ逃走する事態になったのかを考えなければならぬ。消費主体を使い、その理由を説明できるほど、物事は明確ではない。なぜなら、消費主体である前に、子どもは誰でも母語をなんの抵抗なく学ぶと言うことを指摘していたが、そんな子どもがどのような経過を経て消費主体となるかはここでは明確ではない。しかし、著書は教育の崩壊は子どもの価値の変化によってもたらされて

いるとして、つまり、逃走することで教育を変えた張本人は子どもである、と言う風に、子どもに問題を押し付けている。

また、二つ目の疑問は子どもが発する無為はノイズや無意味であるのかということである。学ぶ価値がなければ学ばないと言う行為は自らの世界を縮める。これは同感である。しかし、子どもからの「これはなんの役に立つの？」と言う質問が、実は子どもの消費主体的な価値からくる意味ではなく、教師や先生と意見を交わしたいと思うシグナルであれば、以上のように受け取ることは、そう解釈した側のコミュニケーションの失敗ではないだろうか。師を持っていることが重要であると言及しているが、今の状況を説明すると、師をもてない状況までに社会が低下したと言うことが言えるのではないだろうか。尊敬できる大人が居ないそれが子どもや若者の無為を生んでいる理由ではないだろうか。つまり、筆者が子どもの無為を批判していたが、それもノイズではなく子どもからのシグナルではないだろうかという事である。私はそう考える。では、それをどう改善していくのか、本書を読んだ以上は得られなかった。

しかし、一方で共感する部分もあったのも確かである。それは労働についてであるが、転職を繰り返すことによつて、自らの階層を下げているという点である。これは、私に中学生の私が部活について思っていたことを喚起させた。中学時代はほぼ多くの生徒が部活動に専念していたが、そこから退部すると言うことはやや、中学校という社会において、そこでの反社会的な行為に私の目には映っていた。つまり、部活をしていた生徒は、がんばっているやる気のある生徒に見えるが、退部した生徒にはなにかしらマイナスな評価が付きまとうと言う印象が当時の私の考えにはあった。そして退部したということは、つまり何かの理由でやめた、つまり逃げたという風に目に映ったのである。その逃走を正当化するために今後、自分

に不利になるであろうことは、今回の例になつて逃げるといふ方法を学んだ、そんな人には一生逃げる癖がついてきて、良い人生は送れないのではないのか。以上が当時の私の考えである。しかし、これは大間違いで、そこには人間は変わるといふことを私は、見落としていた。つまり、最も言いたいことは、逃走した人も、いま逃走している人も変わるといふ可能性を持つていたのである。その変化は良い、悪いは判断しがたい。それは個人の判断に委ねるしかないが、その変わるうとしてゐる人々に対して、ただ批判を送つても意味がないというのが、今の私の考えである。

また、子どもの逃走と同じように、若者の労働からの逃走についても考える点がある。それは、労働からの逃走は弱者からの悲鳴ではないだろうかといふ事である。フリーターの問題を見てみると、余りにも労働環境や雇用環境が悪すぎる例も近年出てきた。それを考慮して、彼ら、彼女らの逃走を見ると、それは私にとっては悲鳴と映る。それをただただ、消費主体であることからの価値の相違による逃走と解釈するのは強者の見方ではないだろうか。

以上の点から、私が言いたいことは、逃走することは悪いことではないといふことを主張したい。著者は売春する人に対してどうにかしたといふ気持ちがいまの逃走する子どもや若者をどうにかしようとする気持ちに似ているといつていたが、彼ら、彼女らの逃走は悪ではないのである。しかし、筆者は悪と認識してゐるのではないだろうか。しかし一方で、著者は主張しつつも最後の部分では自らの展望を述べていたのでそれに対しては期待する。

全体的に思うことは、今の社会自体が下流志向ではないだろうかといふことである。よつて、その下流の現象を学校の子どもや若者の逃走にだけ注目して、彼らは間違つてゐることを主張してもこの下流は加速するだけではないだろうかと考える。つまり、下流志向

は社会にまで浸透してゐるので、そうすると大人は何から逃亡してゐるのか、私はぜひ知りたいのである。下流志向はすべての人々が学ぶことや労働の意味を見失つてゐることである。しかし筆者は、なぜか子どもや若者に注目し彼らの逃走を批判してゐる。ぜひ、大人の学びからの逃走も論じてほしいものである。

第三席

『下流志向』を読んで考えたことゝ学ばない、働かないという選択

国際交流学科 四年 菅田久美子

ここにふたつの命題があるとす。

…ある人が「何か」になるとき、その人はそれになりたくてなるのだろうか。それとも周りの環境によつて、ならされるのだろうか。また、

…ある人が何か行動を起こすとき、その人はそれを行いたくするのだろうか。それとも周りの環境がそうさせるのだろうか。

この問いに対する回答を、内田樹氏はその著書『下流志向』学ばない子どもたち／働かない若者たち』の中で、次のように述べてゐる。

「学ばない子どもたちは『学ぶことに消極的』のではなく、『学ばないことに積極的』なのであり、働かない若者たち（いわゆる『ニート』）は『働く意思が弱い』のではなく、『働かない、という固い意思』を持つており、積極的に『ニートという職業』を選択してゐる。ただし、彼らはそう考えざるを得なくなるような環境下に置かれており、その環境を作り出したのは彼らの親の世代ではないだろうか（概略）」

何度かどこかで目にしたり、耳にしたことがあるような見解ではある。恐らく実際にTVやラジオ、雑誌や新聞などでそのようなことが述べられていたのだろう。もしかするとこれと同様の意見を持つ人が大多数なのかも知れない。

それでは私自身はどのような意見を持ってこの問いに答えるのだろうか。正直な話、恥ずかしながらこれまでほとんどそういったことを考えずに過ごしてきたので、現状としてはそれらに対する明確な回答は持ち合わせていない。今回はいい機会なので、書き進めながらそれについて考えてみたいと思う。

まず私自身はどうだろうか？なりたいたいものになっており、それになるために自分自身の意思で努力してきただろうか？

例えば、私は現在、本学で「大学生」という身分についているが、これは私が「なりたくて」なったのであるだろうか？これには自分自身では「YES」と回答することができ、「今日び大学くらい出ておかないと」という周囲の意見ももちろんあるにはあった。しかし私には元々どうしても学びたいことがあり、それ自身とそれを学ぶための周辺知識を入手するために、そういった周囲の意見を考慮するまでもなく進学の意思はあったのである。ちなみに本学以外にも「大学生」になれる学校はあったのだが、取捨選択（これは経済的・学力的事情を加味し、自分自身の「意思」で行なった）の結果、本学に籍を置くようになった。

では、そのために最大限の努力をしたのであろうか？この自問には「YES」、ただし条件付き」と回答せざるを得ない。本学の入学試験に合格するため、としては最大限の努力を行なったと言いつつ、それができる。ただし、前段落でも述べたが、本学に籍を置くにあたり、いくつかの取捨選択を行なった。その際に選択判断基準となったもののひとつに「自分自身の学力」がある。単純に「大

学生になる」という目的だけを考えれば、例えば「日本の首都名を冠する学校」や「立憲改進黨を結成した人物が創立した学校」でもよかつたのだが、その入学試験に合格するためには、寝食を惜しんで学習しなければならなかった。ただそこまでの努力をする気持ちにはなれず、またそれを実施したりもしなかった（これは内田氏の述べる『不快貨幣』の等価交換にあたるのであるだろうか？）ので、その点では「最大限の努力を行なった」と言い切ることができない。ただし、繰り返すようだが、本学の入試に合格するための努力、という点では「最大限の努力を行なった」と言い切ることができる。

では、そのための努力は自分自身の意思によってなされたものだったろうか？これに対しても堂々と「YES」と答えることができる。本学入学を目標に定めたのが自分自身の選択であつたため、その目標完遂のための努力は自分自身の意思で行うことができた。これがもし仮に周囲の人間が薦める、例えば先に挙げた二校などを目標にした場合など、かなり無茶な努力を必要とするのであれば、それはあくまでも（他者から）課せられた「ものであって、「自分自身の意思」とは言えなかつたのではないかと思われる。

以上、私自身に関する自問自答で出せた、冒頭の命題に対する回答は

：「なりたくて」なる。

：「行いたくて」する。もし周囲の環境がそれを「させる」のであれば、その環境は自分自身が「好んで作り出した環境」である。

ということになる。

ただしこの回答はあくまでも私自身、しかも大学進学に対する事象だけで考えたものであり、極端な例を出せば、貧困な地域に生まれたがために意に反する行動をとらざるを得ない場合や、今まさに

自分自身に迫った危険を回避するためにとつた行動などに関しては触れていない。そこまで極端な例ではなくても、体力が弱くてスポーツができない場合や、子どもがいるから離婚しない、などについても同様に、私の狭い事象から導き出した回答で軽々しく触れるわけにはいかない。

私たちの世代は教育を受けることが当たり前になりすぎて、その大切さやありがたみがわからない。何で学校に行かなきゃいけないの？」「この勉強は何の役に立つの？」と思ったことは、おそらく多くの人に覚えがあるはずだ。自分の苦手科目を前にした時に「どうせこんなの役に立たないし」という理由をつけて勉強を放棄するというのは、恥ずかしながら私にも経験がある。役に立つからする、役に立たないからしない。この考え方は内田氏の指摘するように、一昔前には見られなかったであろうと私も思う。平和な国の平和な時代に生まれ、欲しいものは何でも手に入り、食べ物に困ることもないし、命の危険にさらされるようなこともない。「学校に行きたくても行けない子どもが世界中にこんなにいるんだよ」と学校で教えられても「いいじゃん。代わって欲しいよ。」と言い出す始末。そもそも勉強を、役に立つ、立たないで考えられることが幸せだということに、そのことに全く気付かない。働きたくても仕事がないという人は世界中で数え切れないくらいいるというのに、日本のニートは仕事があるのに「働かない」という選択をしている。本来ならどの仕事にするかという選択になるはずなのに、働く・働かないという選択から始まってしまっている。私たちは恵まれすぎた環境に育ってきたせいで、どこか傲慢で無神経というか非常識というか、そういったところがあるのではないだろうか。学ばない子どもたち、働かない若者たちは、自分でそのような選択をしたにしろ、環境がそうさせたにしろ、なぜ学ばなくてもまたは働かなくてもやっ

けるのかをよく考えてみて欲しい。そして親たちはなぜ自分の子どもがそのような選択をするに至ったのかを考えてみて欲しいと思う。自分も学ぶことに傲慢になっていたのに、なんだか偉そうなことを書いてしまったが、自分自身への反省をこめて述べたまでである。

紹介 私の好きな児童文学 第四回

『九月姫とウグイス』 サマセツト・モーム著 岩波の子どもの本

横浜市立図書館、神奈川県立図書館 所蔵有

子供のころの私は、遠足で動物園や水族館に連れて行かれるたびに、ベソベソと泣き出しては級友に笑われたり、先生を困らせたりしていた。動物を飼うのも苦手だ。本来、自由に走り回ったり飛んだり泳いだりしているものを、小さなところに閉じ込めたり、綱をつけたりするなど、あまりにも酷いと強く思ってしまうのだ。私はいつからそんなふうに感じるようになったのだろうと、ずっと思っていた。

『九月姫とウグイス』は、サマセツト・モームの唯一の童話である。私はこの本を二〇年くらい探していた。が、著者名はおるかタイトルすら不明、覚えていたのは、A5版くらいの大きさの本であったことと、タイ風の尖った冠をかぶったお姫様がずらりと並んだイラストがあつたこと、それから内容の切れ端（王は子沢山で、王女は一月、二月、三月…、王子にはABC…と名付けていた。王は王妃に向かつて、これ以上子供を産んだらお前を殺すという）だけであつた。

だから、昨年秋、この本を全く偶然にネットオークションで見

かけたときには、パソコンの前で、うわぁと叫んでしまった。

それは、本当に偶然だった。私が唯一覚えていた、「タイ風の尖った冠をかぶったお姫様がずらりと並んだイラスト」のページが、サンプル画像として掲載されていたのである。そこで初めて、この本のタイトルが『九月姫とウグイス』であり、モームの著作であることを知ったのだ。しかも挿絵は武井武雄で、なるほど、それは印象に残っているはずだと思った。

それは古本としても状態が悪く、シミやカケがあった。にも関わらずお値段はけっして安くなく、しかも入札してくるライバルさえいて、どうしてももう一度手にしたかった私は、取られてなるかと、オークション終了まで動向を見張っていた。無事に落札でき、自宅に本が送られてきたときは、開封するのももどかしいほど嬉しかった。

王様は九人の姫にそれぞれ鸚鵡をやったが、末娘の九月姫の鸚鵡は、ほどなくして死んでしまう。嘆く姫のところに、ウグイスが飛んできて綺麗な歌や、空を飛びながら見聞きした楽しい話を聞かせてくれる。姫はウグイスが大好きになり、自分だけのものにしたくなる。

姫はウグイスをだまして籠に入れるが、どんなに優しい言葉をかけてもウグイスは、ものを食べず、歌も歌わず、動かなくなってしまう。

姫はついにウグイスを放してやる決心をする。

「じゆうでなければ、わたしは、うたえないのです。うたえなければ、しんでしまいます」と、ウグイスはいいました。

九月姫は、また、なきだして、「じゃ、じゆうにおなりなさい」と、

いいました。「おまえをかこのなかに入れたのは、おまえがすぎで、わたしひとりのものにしておきたかったからなのよ。でも、それじゃ、死んでしまうなんて、おもいもかけなかったわ。さあ、いくといいわ。いけのまわりのヤナギの木のあいだや、ああおとした、田んぼのうえへ、とんでいくといいわ。わたしは、おまえがすぎだからこそ、じぶんのいいようにさせてあげるのよ」

(中略)

ウグイスは羽をひろげて、まっすぐに、あおい空へとんでいきました。

お姫さまは、わっと、なきだしました。じぶんのしあわせよりも、じぶんのすきなひとのしあわせを、だいいちにかんがえるのは、とても、むずかしいことだからです。

と、モームは綴る。

やがてウグイスは自由に空を飛びまわり、すっかり元気になって姫のところに戻ってくる。そして以前のように広い空から眺めた美しい風景や覚えたての歌を聞かせてくれるようになった。やがて非常に優美に成長した九月姫は、隣国の王妃となった。

たわいもない童話ではあるが、この本が私に与えた影響は大きい。私は今でも動物が飼えないし、私自身、押し付けや拘束をひどく嫌う。

近ごろ世の中が、妙な方向に動こうとしているように感じているのは私だけではないはずだ。

「じゆうでなければ、わたしは、うたえないのです。うたえなければ、しんでしまいます」というウグイスの言葉は、私たちに向けたメッセージでもあるだろう。

(図書館 鈴木)

第三回創作コンクール作品募集

募集ジャンル 詩・小説・戯曲

応募資格 本学学生・院生・科目等履修生

応募〆切り 二〇〇七年一月三日(月) 一七:〇〇

結果発表 二〇〇八年一月一六日(水) 緑園図書館四階館長室

賞と賞金 第一席：二万円分 / 次席：一万円分

第三席：五千円分 / 応募賞：三千円分の図書カード

大学祭企画 ザ・表現！ 作品募集

読書運動プロジェクトの今年度テーマを念頭に置き、児童文学を読んで考えたこと、イメージしたことを好きな形で表現してください。公序良俗に反しない限り、何をするのも自由です。応募作は全て大学祭のときに図書館内で発表します。

募集作品例 マンガ、小説、エッセイ、評論、作詞、作曲、絵画

立体作品写真、戯曲、ダンス、パフォーマンス他

(どんなものでも可)

応募資格 本学学生、院生、科目等履修生(団体での応募可)

応募〆切 二〇〇七年一月一〇日(水)

発表 大学祭にて緑園図書館で発表。応募多数の場合は審査あり。

賞品 応募者全員：千円分の図書カード

*学内掲示ポスター、応募用紙(図書館で配布)を熟読の上応募してください。

良い文章を書くコツは色々あると思いますが、たくさん本を読むことと辞書を引くことは、最も手っ取り早い修行だと思います。本を読むと、知らず知らずのうちに自分の中に抽斗が増えていきます。また辞書を引くと、思いもかけない言葉と出会えます。たくさん抽斗につまったたくさんの方の言葉をどうやって出力するか、それは練習です。

子どものころ、日記をつけて先生に提出するという課題を出された経験のある人は多いことでしょう。数をこなすことで、文章は確実に上達していきます。読書運動プロジェクトでは、様々なコンクールを開催しています。たくさん読んで書いて、ぜひ力作を投稿してください。お待ちしております。

(図書館事務室)